

# 習熟度別ではなく、 少人数数学級の拡大を

本 山 文 雄

## 一、はじめに

一月の研究集会（新潟県民間教育研究会 冬の集会）で、パネラーの一人として、少人数指導を、「能力別」指導はもちろん「習熟度別」指導にすることに異議を表明した。その後知ったことをふまえ、さらに考えをまとめてみる。

## 二、私が初め考えたこと

二〇〇一年三月。急に少人数授業のことが職場でも出てきた。その時三年生担任だった私は、四年生に持ち上げれば、私も少人数授業を担当することになる。

すでに、能力別編成があることは知っていた。ま

た、それは公教育の中に取り入れてはならないことも考えていた。そこで私は四年生に進級したらどのような少人数授業を進めるかを考えた。

能力別にならない方法として私が考えた基本的な方法は、次の二つであった。

① 二学級を三つの小集団に分ける時、均質に分ける（能力別にならない）。

② さらに、担当者は、学期毎に交代する。そうすることで、保護者の中に生まれる可能性のある「先生の当たりはずれ論」の根を断ち切る。

私は持ち上げられなかったが、私の基本方向で進級した四年生が二教科で少人数学習を開始した。四年生担任二人と級外の応援を得て、それぞれ三グループで授

業が開始された。

### 三、導入された習熟度別学習

ところで、少人数授業に直接かかわっていた方から「習熟度別学習を」という声があがった。このことは、全職員の話題（職員会議）に直接かかることなく、実行に移された。

私は詳しくはわからないが、児童本人の希望も加味してグループ編成が行われた。少なくとも、このグループ編成が差別的であつたり能力別を考えているのではないということを示したのであろう。

年度末になって、習熟度別の実施結果が全体の場で紹介された。習熟度別学習で学習効果が上がった等の前向きな内容だつた。児童・保護者の両方から寄せられたという。

私は、この結果を一定程度好意的に評価できた。少しでも、子どもたちにとって効果のあることは、基本的には良しとすべきだからである。同時に「習熟度別が良い」との結論をすぐ導き出す気にもなれなかつた。

第一は、四〇人弱から三〇人弱へと学習集団が小さくなつたという条件と、均質な学習集団から習熟度別

という同質者の集団に変わったという二つの条件の効果を同時に考えなければならぬということである。

年度末に、前向きの結果が……と紹介したが「発言しやすかつた」「わかりやすかつた」などの反応は、二つの条件のうち、どちらの効果が大きかつたのかは判断しにくい。

第二に、習熟度別が能力別に迷い込む危険性にも目を向ける必要がある。現在習熟度別学習のグループ編成は、単元毎の編成になっている。編成期間が通年になれば、それは結局能力別編成になってしまう。「単元毎の編成では、煩雑だし、教師が児童を把握しきれない」等の意見があれば年間を通しての編成になる可能性がある。

一方、単元毎に学習集団を編成すれば、別な問題が発生する。単元毎に編成しなすおす教材では、学習集団が常に変動することになる。小学校段階では、安定した人間関係の学習集団が必要であるが、その条件を満たさなくなる。それは、教師との関係にもいえる。私の考えた方法では、担当教師は、学期毎の交代であつた。それでも担当教師からは「学期ごとの交代では、子どもを把握しきれない」との声があがっていた。そ

れが、単元毎では一層厳しくなる。小学生は、大学生が講義を受けるのと違うのである。

#### 四、長岡の実態

では、私の勤務する長岡市内では、習熟度別学習をめぐってどのような動きになっているのだろうか？データをもとに考えてみたい。

昨年度、長岡市内での少人数授業は、県からの加配教員二八人(小一六八・中二一人)を受けて、合計二九校で実施された。そのうち、小学校では、半数近くの九校で、中学校では三分の一の三校、計一二校で習熟度別学習が実施されている(下の表参照)。実施しての結果は、それぞれ学習意欲の向上が見られたり、興味が高まった等の意見が寄せられているという。習熟度別実施の割合が意外に少ないと感じる。

長岡市における習熟度別編成の実態(2001年度)

校種	習熟度別	課題別	等質集団	合計
小学校	9	0	11	20
中学校	3	0	6	9

またグループ編成では、能力別にならないように配慮している様子も浮かがる。

長岡のある中学校で生徒の教科学習の苦手・得意意識調査をしたという。数学と英語だが、数学を苦手と応えた生徒は三学年とも四〇から五〇%台、英語でも三〇から四〇%台だった。また、「どんなことを教えてほしいか」として「基礎的・もっと高いレベル・今の程度」を聞いたら数学では、どの学年も五〇〜六〇%台が「基礎的なことをしっかり教えてほしい」を選んでいったという。

このことから、生徒にとっては、「わかるように教えてほしい」が切実な願いであることが見て取れる。

#### 五、文科省は……

では、生徒の「わかるように教えてほしい」の願いに、新教育課程を提起した文科省はどのように応えようとしているのだろうか。

今までの指導要領給則第一章4の2の(4)では「…児童の実態に応じ、個に応じた指導など指導方法の工夫改善に努めること」とだけの表現にしていた。今回のそこには「…個別指導やグループ別指導、繰り返し指導、教師の協力的な指導など」と具体的な指導方法

が書き加えて列挙された。しかし、ここには、習熟度別や能力別の言葉は見られない。現場に任せられた問題と考えられる。とすれば、私たちは十分な検討の上に結論を出す必要がある（もちろん、文科省は、学級定数を四〇人のままで進んできていることを見据えた上でのことだが）。

## 六、私たちの進むべき道

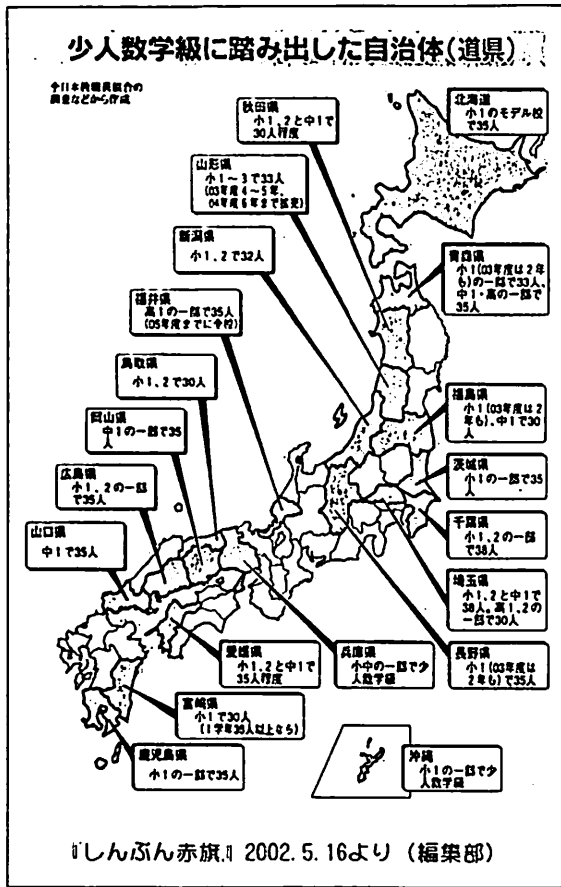
少人数学級の強い要望に応えて、次のように考える人もいる。「少人数学級は、指導効率をあげる単なる一つの選択肢である。事実、ある大学で、少人数授業を試みたが、効果が上がらなかった。原因は、意欲のある学生とない学生とが混じっていたからだった。そこで、意欲のある学生は多人数で、意欲のない学生は少人数で編成したら、効果が上がった」という。ここでは、個々の大学生の実態（意欲）に応じる必要性を強調するあまり、小学校で大切にされなければならぬ人間関係をも育てる学級社会（学級）の重要性が無視されている。意欲だけを考え人間関係を育てることを切り離すことは、大学では可能でも、小・中学校では無理なことである。ましてやこの例をもって、四〇

人学級が現状のままではよいか、少人数学級が選択肢のひとつでしかない、などとして少人数学級実現の課題を後景に追いやるのは論外である。

現場には、習熟度別こそが良い、という論調の人もいる。事実、水泳やスキー授業では習熟度別の編成が行われている。私の学年でもそうであった。しかし、この場合でも、その種目の時だけという限定付きであり、かつ、グループの移動が簡単に行われる。スキーの場合、一日だけのスキー教室だから、グループ間移動は易しくないが、水泳の場合は、時間の途中でも上達すると一つ上のグループへ移動させた。

結局、現在の教育条件の下で子どもたちの「わかりたい」という願いに応えるためには、習熟度別学習は限定された条件の範囲内でのみ有効である、ということであろう。その厳密な条件として考えられることは、①編成は、一つの単元を学習する期間を超えないこと②すべてのグループが到達目標を同じくする。③そのために、テストも同じ問題を使用する、等が必要である。

同時に、普通の学級において、個に応じた指導をどのように実践するかを大きな課題としなければなら



らない。私たちは具体的に何をしたらよいのだろうか。それだけでなく忙しい毎日である。また、指導要領の内容が現在のままで良いのか、という問題もある。それらの問題に取り組みつつも、現実に目の前にいる子どもたちの願いに応えることも重要である。

先日、新年度第一回目のテストをした。結果を見て、「一人一人の定着度をしっかり見ていたのか」と

いう反省をした。ドリルの進度がまちまちのままテストをした自分に気がついた。すべての子どもが「わかった」といえるようになる方法を考えなければならぬ。

私は、最近授業の中で子どもたちが教え合うスタイルを導入している。練習問題が早く終わった児童が「中先生」として、友達のを確かめたり、わからない児童の質問に答えてあげる仕組みである。まだ実施はしていないが小テストも工夫される必要がある。

指導要領の拘束性をなくしたり、少人数学級の実現をはかる運動と同時にこうした目の前の子どもたちの「わかりたい」という願いに直接応える取り組みは、車の両輪である。

(もとやま ふみお・  
長岡市立豊田小学校)